清水 正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ⑲

花香る樹木に誘われて山歩き

～クチナシ・テイカカズラ・コアジサイ・ネムノキ～

初夏、蝶や甲虫・蜂たちが盛んに飛び交うようになると、草花ばかりではなく、樹木の花も目立つようになります。樹木の花は草花に負けじと良い香りを出し昆虫を引きつけます。昆虫ばかりでなく私たちもその芳しい香に誘われはっとすることがあります。町の中でも、植え込みなどによく使われているクチナシは真っ白で中型の花と言うこともあり目立ちます。道を歩いているとどこからともなく甘い香りが漂います。ふとあたりを見渡すとクチナシの花が咲いています。思わず鼻を近づけて嗅いでみたくなります。でも一寸気を付けて、時に先約がいたりすることがあります。蜜や花粉を採りに来た昆虫たちです。匂いを嗅いで鼻が腫れるというのは洒落になりませんからね。

町の中でみるのは八重クチナシだったり、花も葉も小型のコクチナシ、コクチナシの八重咲きが多いですね。山野に出かけると自生のクチナシ（単衣）を見ることが出来ます。せっかくですから八重のクチナシをじっくり観てみましょう。花弁をかきわけるようにして花芯に迫ると花弁とも雄しべともつかないものが見えたりします。これが八重咲きの正体なのです。雄しべが花弁に変化した。自然界でもたまに起こることです。ある意味、植物は変幻自在なのです。しかし、雌しべはしっかり守ります。雌しべを花弁に替えたら実を作れず世代交代が出来ませんから。一一月ころ、実はきれいなオレンジ色に色づき、今度は私たちの目を愉しま

クチナシの実

クチナシ

せてくれます。またこの実はこの鮮やかな色を着色剤として栗きんとんなどに使うことでも有名です。

名前の由来はいくつかありますが、最もポピュラーなのが、実が熟しても割れないので「果実に口がない」と言うところから口なしとなった説でしょう。皆さんの中に、碁や将棋をされる方がおられましたらこの由来と碁盤・将棋盤（上等な分厚くて足の付いたもの）との関係にぴんとこられると思います。盤の足はあるものに型どられています。あるものとは梔子（クチナシ）の実です。勝負は厳正で、試合中に助言（口を挟むこと）は許されません。それをクチナシ（口無し）の実で体現したというわけです。蛇足ですが盤の裏の真ん中に四角の凹みとその中にピラミッド型の彫り物があるのをご存知ですか？これを「血溜まり」と呼ぶそうです。試合途中に口を挟めば首を刎ねられる、そしてその首を血溜まりに乗せるというのですから、いやはや囲碁や将棋の世界の勝負は並大抵のものではありません。

クチナシと同じ頃に、山道を歩いていると涼やかないい香りに包まれることがあります。周囲を見渡しても香りの源泉は見当たりません。諦めて地面をみると径二 cm 程度の白い花が散らばっています。よく見ると普通とは違い五枚の花弁がスクリュー状にねじれています。まるで風車のようです。テイカカヅラです。もう一度山の斜面を見上げると大きな木に絡まりながら上の方に蔓を伸ばし星屑のように散らばった花が見られました。以前この花の香りと白の可憐な花の美しさにふと蜜を吸ってみようと思い花を手に取り

テイカカズラの葉
（葉表の模様 A）

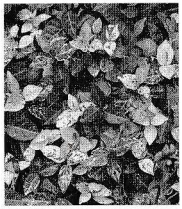
テイカカズラの葉
（葉表の模様 B）

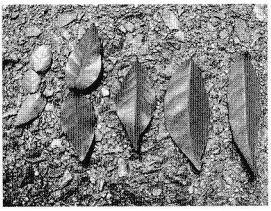
テイカカズラの葉
（葉表の模様 C）

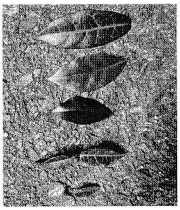
テイカカズラの葉
（葉表の模様 D）

テイカカズラの花

蜜を吸い出しました。その時テイカカズラはキョウチクトウ科だということを思い出し、「やばい」とすぐに吐き出したことを覚えています。テイカカズラは有毒です。私は特にどうということはありませんでしたが、自然のものを口にするときは気を付けなければいけません。花が咲くとわかりやすいですが、花のない状態で生えているテイカカズラを見分けるのはなかなか難しいです。出だしたばかりの葉身が一cm程度の葉ともう少し大きくなった葉、更に大きくなった葉では葉の様子がずいぶん違い、同じ植物とは思えません。しかし葉の裏の網の目のように細かな葉脈は独特のものがあり、どの状態でも変わりなく見間違うことがありません。


テイカカズラの園芸種・ハツユキカズラ


テイカカズラの葉裏（葉脈の模様は）


テイカカズラの葉表、サイズの違い

秋になると、この花からこんな実がと思うような実が熟します。長さは二〇cm程の細い弓状の袋果です。この実が二つ対になってぶら下がり完熟すると莢が縦に裂けて種の上部にパラシュートのように綿毛をつけたものが飛び出し、ふわふわとあたりに飛び交います。どの時期をみても飽きることのない植物です。名前もすごいですね。漢字で書くと「定家葛」、この定家は言わずとしれた平安時代の歌人藤原定家のことです。定家は式子内親王（後白河天皇の第三皇女）を恋い慕っていたが、内親王は早くに亡くなってしまいました。その墓には葛が絡まりついて離れなかった。これを亡くなってもなお慕い続ける定家になぞらえて「テイカカズラ」と呼ぶようになったという話が伝わっています。

庭などにテイカカズラと似たつる植物を見たことはありませんか、姿形はそっくりですが葉に白や薄ピンクの斑が入っています。これはテイカカズラの園芸品種でハツユキカズラと呼ばれるものです。葉が花のようにカラフルなのが好まれて植栽されているようです。

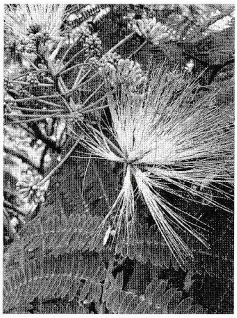
確か二〇二〇年八月の「一里一尺～自然を訪ねて③」でアジサイ

について幾つかの話を掲載したと思いますが、その中にあったコアジサイについて少し深めてみましょう。関東地方以西から九州までの山地や丘陵の明るい場所に分布をしています。京都や滋賀でも良く見受けます。他のアジサイのように飾り花をつけていないので地味ではありますが満開の時期には少し離れてもわかるほど甘い香りを漂わせてくれます。勿論、咲き出しの頃もほのかに香り、つい近づいて香を嗅ぎたくなってしまいます。案外この花が香ることを知る人は少なく、鼻を近づけるとたちまち笑顔と新しいことを知った喜びの表情を浮かべます。私はこの時の反応が実に楽しく嬉しく思います。人は自分の知らない世界を知ると嬉しいものなのですね。難しい言葉で言えば「知的好奇心を満たされた」とでも言うのでしょうか。しかしコアジサイは林道の林縁部などによく生えているものですから、草刈りでかられてしまうことが多く、何年たっても小さい状態でいるものが多いです。そして背丈が低い分シカの害にも良くあっています。

コアジサイ

これらの樹木の花が終わる頃、咲き出すのがネムノキです。七月の初旬、滋賀県朽木の蛇谷が岳に登るために湖西道路を通り高島市安曇川に出て朽木へ向かう県道を走りました。濃い緑の葉に映えた淡紅色の花が、風に揺られて波にたゆたうような感じでした。いつも思うのですが、花の咲く時期になるとこんなにも多くの○○があったのかと驚きます。この時も次から次へと現れるネムノキに驚き、美しさに魅了されながら登山口へと向かいました。いざ登山道に入っていくとあんなにあったネムノキはどこへ行ったのでしょうか、とんと見当たらなくなりました。確かに他の地でも里や山麓ではよく見ますが奥山には見なかっ

ネムノキの香に包まれて


ネムノキの花

たことが思い浮かびます。実は登山口に着くまでにあまりに見事なネムノキの所があったので途中下車をしました。降りた瞬間。甘い桃のような香りに包まれました。もうずいぶん昔ですがどんな香りがするのかと嗅いでみたところ、なんとその香は熟した甘い桃でした。それ以後、ネムノキを見つけると一緒にいる友人に匂わせるのです。異口同音に「匂いがするとは知らなかった」「ほんま。桃やわ」という反応が返ってきます。あなたも是非やってみて下さい。

私が初めてネムノキに出会ったのは八月始め秋田に向かう列車の車窓からでした。その時一緒に旅した友人が「象潟や雨が西施にねぶの花」と奥の細道にある芭蕉の句を教えてくれました。そのためか私のネムノキの咲く時期は真夏に設定されました。でも関西では梅雨明けから夏の始まりですね。花をじっくり観てみましょう。赤く見えているものは雄しべの花糸で、その先に黄色い葯がちょこんと乗っています。数は多数としか言いようがありません。一度根気強く数えてみますか？雌しべは雄しべより長く少し突き出しています。色は白です。花弁はというと、その下の方に五弁で淡黄緑色のものが目立たずにあります。これらがセットになって一〇から二〇が扇形に広がってついています。これが一個の花のように見えています。ネムノキはマメ科ですから莢状の実を付けます。ここでマメの花をご存知の方は気づかれると思います。マメ科なら蝶型花冠と呼ばれる独特の形をした花のはずですが、ネムノキは全然違います。不思議です。しかし葉の形も実の形も、根に根粒菌を作り窒素固定（空気中の窒素を有機化合物に変えて栄養素として吸収できるようにする）することもマメ科そのものです。名前の由来は夜になると葉を閉じ、翌朝には葉を広げるという睡眠作用を行うことから「寝むの木」となったという説があります。ネムノキはまだまだ面白いことあります、自分で観察してみませんか。今回は花が香る樹木の話をしてみました。

細い糸のようなものは雄しべで先に花粉が付いています。少し突き出ているものは雌しべ。
下部に傘が開いたように見えるものが花弁です、更に下のものが萼です